

産着についての一考察

森山和美

序文

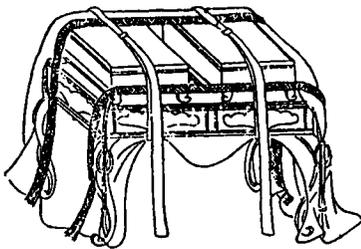
本論

第一章

私はかねてから産屋と産着について関心を抱いていた。古書を調べているうち、江馬先生の御著に「現代でも福井県の敦賀の地に村民共有の産屋が残っている。」という御論に接し、休みを待って現場に行った。産屋は在った。もちろん家屋は古いが、屋内には天井から太い力綱、壁に神棚と燭台がひつらえてある。昭和三十九年頃まで使用した（同市教育委員会の調査）という産屋に深い感銘を受けた。同時に私は当時の情景を想像し、産着に対する興味と研究意欲を一層かきたてられ、資料不足、研究の不備が本意ではあるが、今回ここに纏めてみた。

本論は第一章を平安朝から江戸末期までの産着の歴史の変遷の大略を述べ、第二章は本校所蔵の宮詣り着三点と第三章は近江八幡市立資料館の資料を調査した記録である。

生児に着せる着物を、産着といった。これは足利時代からの名称で、それ以前はむつき、または産衣といっていたらしい。平安時代の公家や武家では、産まれてすぐに白地平絹、または空色平絹の産衣を着せ、そのあと色直しと称して、色のある衣服を着せる風習であった。



(第一図 江馬務著一生の典礼抄出)

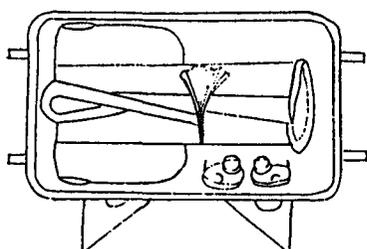
平安から鎌倉時代には、色直しは百日、または百三十日で、その児の干子によって吉色をえらんだと、「産着之巻伝記」にある。

室町時代中期には、武家では干子にとらわれず自然界にも眼を向け、誕生の時の雲の色を産衣に用いるという風習も生まれたという。

「産所法式」には即ち「産衣の事、色は

不定候。誕生の時、雲の色の如くするなり。誕生の時、雲の色白候へば、産衣の色も白候。雲の色青候へば、産衣の色も青候。赤候へば、産衣の色も赤候。黄に候へば、産衣も黄候」とある。

この頃白は、漸時衰へたのであらう。公家や上層の武家では、誕生後、三日目に白亀甲文浮織細長二領、白重菱文綾単二重、白亀甲文綾襦袢二帖、白穀織帯二筋、白小祭文綾入帷二帖を入れた白塗の衣笥を高脚の机の上に飾り祝いをした。また産養といつて誕生後三日、五日、七日、九日の夜に祝宴が開かれて、親族、縁者から衣服、食物、器具などが贈られた。



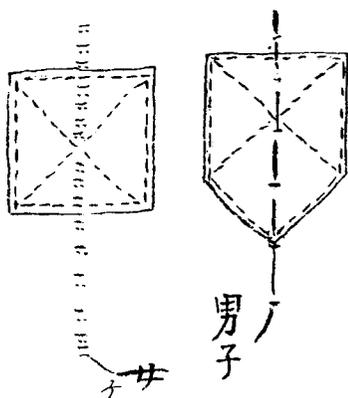
(第二図 江馬務著一生の典札抄出)

近世になると、産着の生地は白練絹、または羽二重で付け紐をつけ、背には胡粉で白く松・竹・梅・鶴・亀の紋が描かれているが、後世には銀泥か、銀箔で、鶴・亀・松・竹の紋をつけた。

また女子の産衣が数ある時は、家紋をつける風習が生まれた。

次に民間の場合であるが、産着は古い着物で作ったが、産着は生まれる前に縫うことは、生児が弱い児になるといふ俗言を守り、生まれてすぐには、地方によつてはポポサツツミといつて、古裂れや前掛け、或いは腰巻などに包んだ。そのほうが健康児に育つと信じていたからで、生後三日〜五日目の産湯

の後に、実家から贈られた袖のある着物を着せることが、生誕後の一つの儀式になっていた。出生後三日目に着せる産着を地方によつては、キサグメ(東京都)、三日衣裳(長野県)、テトオシ(長野・岐阜・兵庫・熊本)の諸県)、ソデトオシ(大分県)、テヌキ(熊本県・愛媛県)、テツナギ(島根県)、テツンヌキ(熊本県)、テカケキノ(埼玉県)、ソデサシ(三重県)などといつて、袖のついた着物を初めて着せるのである。これはほとんど一ツ身で、紐を後につけて前で結ぶ着物である。このことは生児の生命はまだ産神の管理下にあり、霊界と人間界の中間にある不安定なものと思われていたので、産着には魔除けのために必ず背守をつける。第三図は男子の産着に付けた共地で、廻りを縫い中の十字字は白糸、生まれ月数の男針も白糸で、色直し以後は赤糸である。男子は糸の先を左へ留める。女子の場合(第四図)は長針を裏へかえして細かな針を表へ表わすのを女針といつて、襟つきより五分(十五センチ)さげて、生まれ月数を縫う。女子は糸の先を右へ留める。また紅染やうこん染が好まれ、木綿の赤地や紺地に麻の葉とか、井筒などの文様



(第三・四図 産着の巻伝記抄出)

第四図)は長針を裏へかえして細かな針を表へ表わすのを女針といつて、襟つきより五分(十五センチ)さげて、生まれ月数を縫う。女子は糸の先を右へ留める。また紅染やうこん染が好まれ、木綿の赤地や紺地に麻の葉とか、井筒などの文様



(第五図 女有職李文庫より)

をつける風習があった。うこん染(黄色)は怪我よけの呪い、あかね染は瘡痂にかからない呪いとか、他にも紅は血行をよくするとか、うこん染は消毒、健胃、止血剤などの医薬的効用も考えられていたのではない。しかしいずれも生児の健やかな成長を祈るといふ願いがこめられていたものである。

宮詣りの風習は、室町時代の初期には、公家や武士の間で行われていたらしいが、生後何日目にするかということは決まっていなかったようである。江戸時代に宮中では誕生日

から百二十日目、徳川家では百三十日後の吉日を選んだようである。民間では江戸中期頃から男児は三十日目、女児は三十三日目に、氏神へ参詣するということが、一般に慣習として定着したらしい。晴の衣裳に守刀を袋に入れ、守袋を添えて、芋を産着の紐につなぐ。芋は白髪を表わし、長寿までもとの祈願でもある。

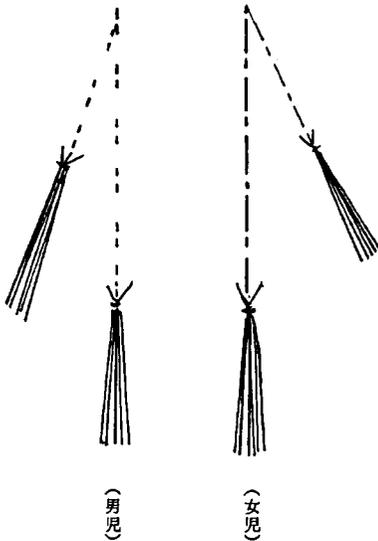
今日では男児は生後三十一日目、女児は三十二日目であるが、地方によっては異なることがある。この宮詣りが定着されてくるにつれて、産着は礼装用として着用されてくるようになったと思

われる。

産着といっても、出産直後に着せる初着、三日目に着せるもの、宮参りに着せるもの、と区別されてくる。この三つを総称して産着と呼んでいるのがややこしい。

祝いの着の特徴は、身丈が長く、一ツ身仕立である。背の上部に背紋をつける。背の上部、左右の袖の後側、左右の胸部につける抱き紋の五つ紋、または三つ紋である。

背守りをつける。子供を守るために後襟下の背紋にあたる所に、三角形のきれをつけたり、田の字を斜にした形を縫いとりたり、色糸で背に守り糸をつける。これは二本どりの色糸で縫い、女児は大針一目、表糸と、小針一目の二目落し、糸の端を右へかぎ型に下げる。男児は大針一目、裏糸と小針二目の一目落しで、糸の端は左へかぎ型に下げる。糸を下げる方向によって男女の区別をする。例外もある



(第六図 八幡市立資料館「産着考」より抄出)

第二章

本校が新たに購入された明治、大正時代の宮詣り用の祝いで着について、その構成、文様、寸法を調べてみると次のようである。

(一) 鼠麻地平織 波に泳ぐ鯉図友禪祝いで着 (男児用)

麻地で単衣、鼠色の地に、鯉と波の図が友禪染で白く抜いた所に、後で文様が描かれているぬれ描きである。紋は後中央の一つ、左右の袖の後側に袖文が二つある三つ紋で、背には青色絹糸二本どりの背守りがあり、背守りの端は左へかぎ型に下がっているのが男児の物である。

鯉が波に見えかくれして泳いでいるダイナミックな文様は、生児の健康と、未来の発展を願ったものであらう。単衣なので裏はないが、袖口には朱色ちりめん地の巾五センチ、丈三十三センチの袖口布が裏についている。

衿裏には巾三センチの赤い絹地衿裏布がつけられ、また八センチくらいの腰揚がある。多分宮詣り用晴着を、長じて着用されていたのではないだろうか。鼠の地色、文様の監の色から年代的には明治初期であろうと考える。(写真第一図)

(二) 浅鼠麻地平織 近江八景友禪文様祝いで着 (女児用)

麻地で単衣、薄鼠色の地色に橋やお寺、山桜の花などの近江八

景の文様が、染料で描かれている。紋は左右の胸部に二つ、背紋一つ、袖文二つの五つ紋である。背守りが赤絹糸でつけられ、糸端は右へかぎ型に下げられているので女児用である。袖はひろ袖で、裏の袖口には紺の絹地がつき、丈四十六センチ、巾五センチの袖口布がついている。また腰紐がついていて、身頃の紐つけには紐飾りがあり、宮詣りの祝いの後も、晴着として着用されたのではないかと思われる。年代は明治時代後期から、大正時代の初期ではないかと推察されるのである。(写真第二図)

(三) 紺緋麻地 子供祝いで着

紺色麻地の単衣緋で、境遇によって祝いで着(宮詣り着)として着用したものであらう。背守りが赤色絹糸でつけられ、かぎ型に糸端は右へ下がっているのが、女児用である。袖はひろ袖で、袖口裏には、袖口布として巾五センチ、丈五十二センチの赤色木綿地の布がつけられている。衿には裏衿に巾三センチの赤色木綿地の裏がついている。また黄色絹地の腰紐もついていて、紐飾りがあり、肩揚と腰揚があるので、宮詣り着として着用後、お祭りなどの晴着として着用されたのではないかと思われる。

年代は明治時代後期から大正時代の初期頃と思われる。

(写真第三図)

以上、三点の袖丈、身丈などは別表の通りである。

写真 第一回 男児用

産着についての
一考察



前



後

裾文様拡大

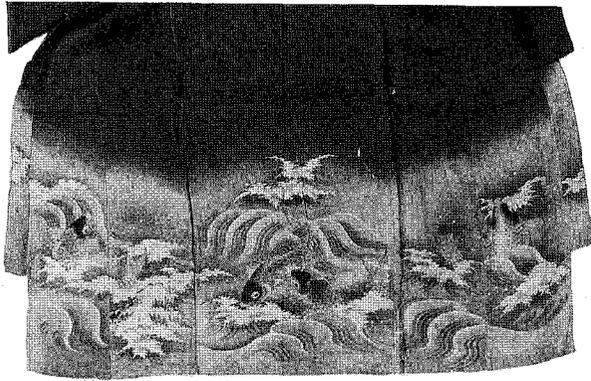
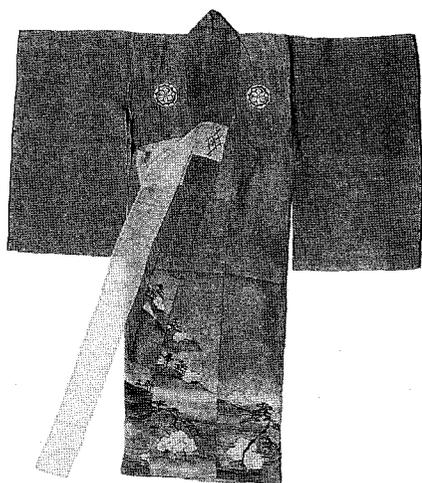
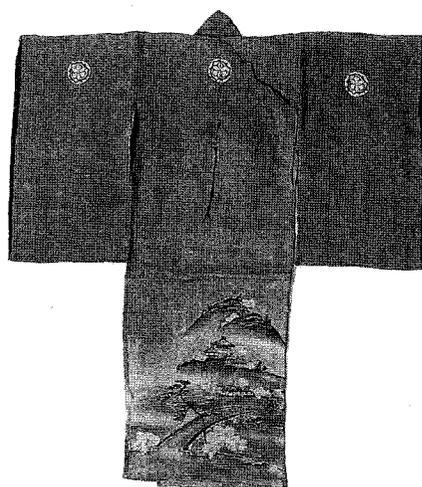


写真 第二図 女兒用



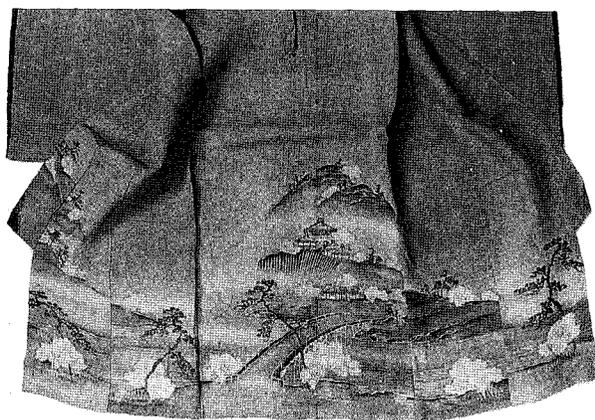
前



後

産着についての一考察

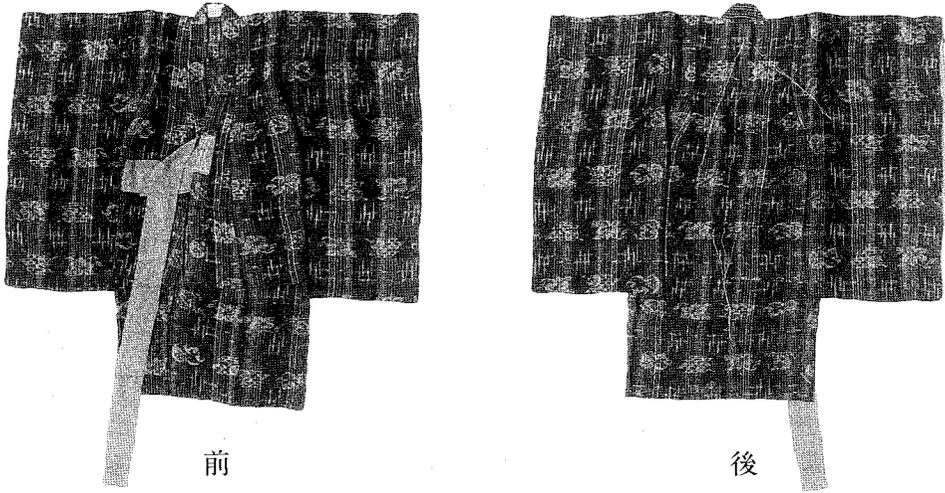
裾文様拡大



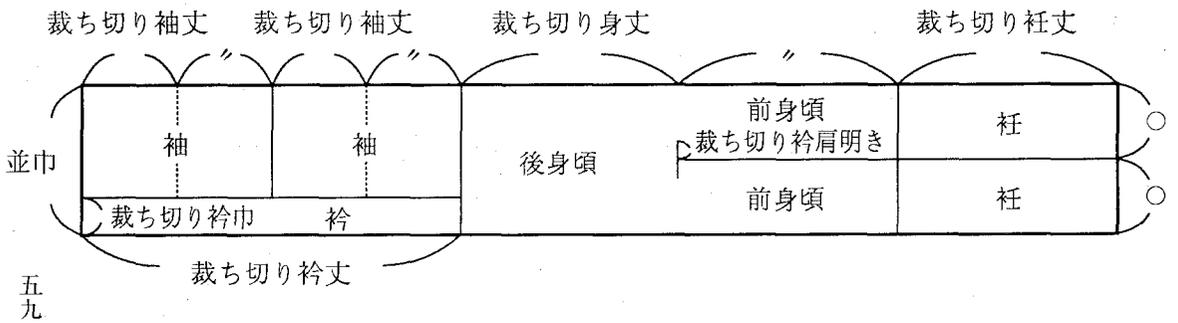
五八

写真 第三図 女兒用緋

産着についての一考察

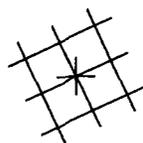
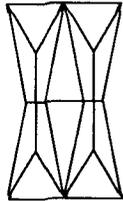


一ツ身広袖祝い着用裁ち方図



祝い着寸法表

(単位cm)

各部各稱 寸法		祝着	鼠麻地・波に泳ぐ 鯉図友禅文様祝着	浅鼠麻地・近江八景 友禅文様祝着	紺緋麻地 子供祝着	
袖	袖 丈		44.0	46.0	52.0	
	袖付け		12.0	15.0	14.4	
	袖 巾		24.0	24.0	25.4	
身 頃	身 丈		95.0	90.0	71.0	
	衿肩明き		4.5	4.5	4.5	
	身八つ口		11.5	10.0	12.0	
	前 巾		13.5	14.5	14.0	
	後 巾		32.0	32.0	32.0	
	衿下がり		10.5	13.0	10.0	
	衿 巾		14.0	14.0	13.2	
	合襖巾		13.5	13.0	12.0	
	衿 下		15.0	22.0	18.5	
	ふ き	袖 口		0.2	0.4	
		裾				
		衿 巾		3.5	5.0	3.5
紐	紐 巾			7.0	7.0	
	紐 丈			85.0	72.0	
紋	紋の数		3	5		
	紋の寸法		5.0	5.0		
守 り 糸	中央の縫目と糸の長さ		(25目) 25.0	(18目) 22.0	(20目) 35.0	
	中央の縫止まりからの糸の長さ		9.0	15.0	32.0	
	左斜め縫目と糸の長さ		(8目) 7.0			
	左斜め縫止まりからの糸の長さ		5.0			
	右斜め縫目と糸の長さ			(5目) 6.0	(5目) 8.0	
	右斜め縫止まりからの糸の長さ			15.0	16.0	
紐飾り			紐なし			

産着についての考察

第三章

次に近江八幡市立資料館に所蔵されている産着（宮詣り祝着）の中から、江戸後期、明治、大正時代の産着、四点を選んでみた。地質、色、文様は別の表による。

(1) 男児用

○紺地羽二重・鶴、亀甲友禪文様産着

地質は紺地羽二重、文様は、鶴、亀甲友禪染め、袷である。年代は江戸後期、紋は五つ紋である。袖丈、身丈、別表による。（写真第(1)図）

(2) 女児用

○鼠麻地・桔梗、女郎花、紫苑友禪文様産着

地質は鼠麻地、文様は桔梗、女郎花、紫苑文様、友禪染めで単衣である。年代は江戸後期、紋は三つ紋である。（写真第(2)図）

○鼠地羽二重貝、流水、赤花友禪文様産着

地質は鼠、羽二重、文様は貝、流水、赤花文様で、友禪染め、袷である。年代は明治中期、紋は三つ紋である。（写真第(3)図）

○鼠地羽二重・松風須磨浦の図友禪文様産着

地質は鼠、羽二重、文様は松風須磨浦の図友禪文様、袷である。年代は明治中期、紋は五つ紋である。（写真第(4)図）

以上四点の袖丈、身丈などは別表の通りである。

あとがき

以上産着の変遷と、宮詣り着について述べた。本論文作成に当たり、近江八幡市立資料館の貴重な御蔵品の一部を参考にすることを御許し戴き感謝致します。また山名邦和先生に一方ならぬお力添を賜りましたことも併せて厚く御礼申し上げます。私のつたない小論に花を添えていただきました次第です。

写真 近江八幡市立資料館所蔵産着(宮詣り着)

写真 第1図 男児用

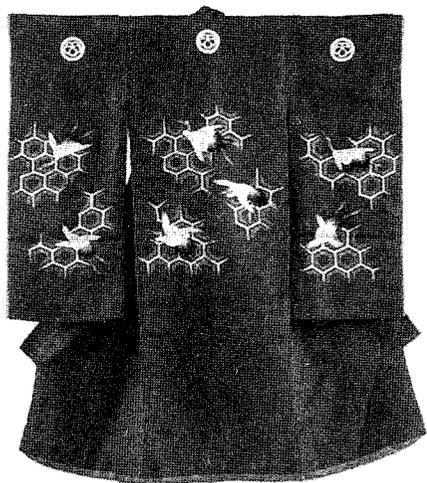


写真 第2図 女児用



写真 第3図 女児用

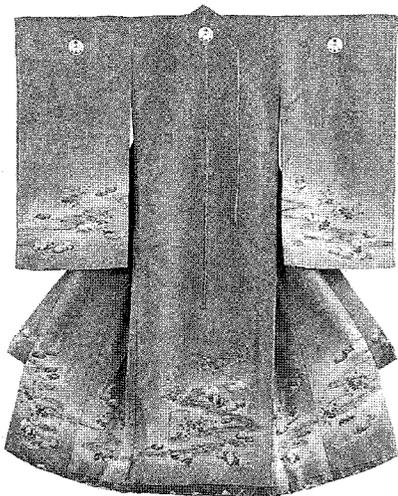
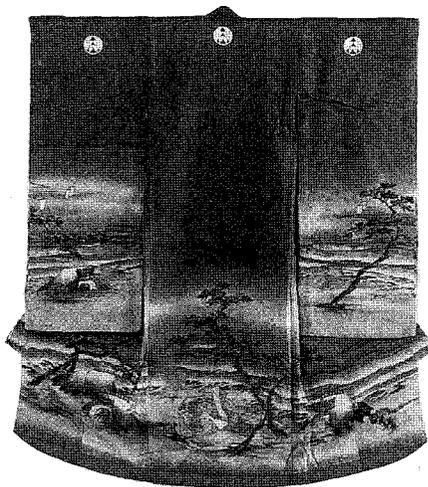


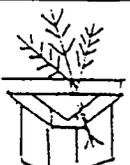
写真 第4図 女児用



産着についての考察

近江八幡資料館所蔵産着（宮詣り着）寸法表

（単位cm）

各部各稱 寸法		産着	紺地羽二重 鶴・亀甲友禪文様	鼠地羽二重 松風須磨浦の図文様	鼠地羽二重 貝流水赤花友禪文様	鼠麻地枯硬 女郎花・棠苑友禪文様	
袖	袖 丈		65.0	72.5	58.5	61.5	
	袖付け		19.0	17.0	18.5	18.4	
	袖 巾		24.0	26.7	26.5	24.0	
身 頃	身 丈		99.0	106.0	107.5	101.0	
	前 巾		16.0	15.0	15.3	14.5	
	後 巾		34.0	34.0	34.0	31.5	
	衿肩明き		4.5	4.1	3.8	4.2	
	身八つ口		11.0	14.8	11.0	12.0	
	衿下がり		11.3	11.5	11.5	11.5	
	衿 巾		14.0	15.9	16.0	15.0	
	合褌巾		13.0	15.3	15.4	14.3	
	衿 下		19.0	18.2	20.0	19.3	
	ふ き	袖 口		0.6	0.4	0.5	0.2
		裾		2.3	3.7	3.0	0.3
	衿 巾		5.1	4.2	5.0	4.2	
紐	紐 巾		6.0	8.1	8.0	7.7	
	紐 丈		88.0	88.3	87.0	88.5	
紋	紋の数		5	5	3	3	
	紋の寸法		5.0	4.2	3.5	4.7	
守 り 糸	中央の縫目と糸の長さ	(21目) 25.5			(6目) 10.3		
	中央の縫止まりからの糸の長さ	44.0			50.0		
	左斜め縫目と糸の長さ	(5目) 5.0					
	左斜め縫止まりからの糸の長さ	44.0					
	右斜め縫目と糸の長さ				(25目) 33.5		
	右斜め縫止まりからの糸の長さ				33.0		
紐飾り		紐付替えの ためなし	紐付替えの ためなし				

近江八幡市立資料館
（宮詣り着晴れ着展より）

産着についての考察

参考文献

- 「産着の巻伝記」著者不詳
『江馬務著作集』第七巻、中央公論社
河鱒実英編『日本服飾辞典』東京堂出版
北村哲郎著『日本服飾小辞典(一)』源流社
山名邦和著「産着考」近江文化財研究所
近江八幡市立資料館「お宮詣りの晴れ着展について」
『日本民俗学大系(六) 生活と民俗』